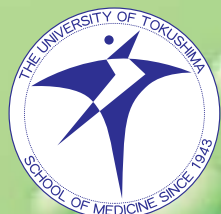


徳島大学



The University of Tokushima
School of Medicine

医学部だより

第1号

2002.12.20

学部長挨拶

21世紀に向けた医学部の取り組み

学部長 曾根三郎



この度、黒田泰弘医学部長の後任として第22代医学部長に選出され、大変光栄でありますと共に責務の重大さに身が引き締まる思いで11月16日より取り組んでおります。

本学医学部は創立以来50年を越え、四国内で最も長い歴史を持ち、輝かしい業績を積み上げて来た経緯があります。蔵本キャンパスには背後に眉山が横たわり、学問研究の場として最適な環境に取り囲まれております。医学部には、歯学部、薬学部、分子酵素学研究センター、ゲノム機能研究センターがそれぞれ隣接しており、生命科学研究のメッカとして注目されております。現在の医学部は医学科、栄養学科、保健学科と3つの母体から構成され、先端医科学での教育、研究の場として今後とも大きな役割と社会貢献が求められております。医学科では課題を設定して自主的に学習していくチュートリアル教育の導入や、クリニカルクラークシップ導入による従来の見学型臨床実習から診療参加型実習への転換が平成13年度より行われ、新しいシステムと教育環境の中で次世代の医師が育ちつつあります。今後は新しく導入されるスーパーローテーションによる卒後臨床研修とリンクさせて一貫した医学教育システムが構築されていくものと期待しております。

平成16年度からの国立大学法人化を迎えて、教育、研究だけでなく、社会貢献を重要なキーワードとして大学院改革が始まっております。今後、外部評価の導入も加わり大学間の競争は生き残りをかけて次第に熾烈となっており、指導的な人材育成と共に経営基盤の確立が大きな課題とも云えます。本学は研究大学としての方向性を明確にしており、先端的な生命医学研究から高度先進的な医療開発へとつなげ社会の進化やニーズに対応する拠点として重要な役割を担っており、指導的な人材育成に向けた大学院教育は最も重要な課題として取り組んでおります。

本学医学部の個性、特色として、ポストゲノム計画の中で今後大きな成果が期待できるプロテオミクスを大学院医科学専攻として設定し、蔵本キャンパス内に隣接する分子酵素学研究センター、ゲノム機能研究センターとの連携による教育・研究の推進と拠点化を図り、世界通用性のある人材の育成に取り組んでおります。同時に医学部附属病院との密な連携により、出来るだけ早く基礎研究成果を患者さんの元へ届けるために高度先進医療開発に向けたトランスレーショナルリサーチを可能とする環境基盤の整備も進めております。先端医科学から高度医療の教育、研究の推進を通して一層の社会貢献に向けて鋭意努力致す所存であります。今後とも暖かいご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

卒後臨床研修について

徳島大学医学部教務委員長 永 廣 信 治

平成16年度から医学部医学科卒業後の臨床研修が2年間必修化される。これまでは卒業後に大学病院で研修する場合は、ある特定の専門診療科に所属してその科のプログラムで研修を行っていたが、今後は臨床研修制度が大きく変わる。現在徳島大学医学部附属病院における新しい研修プログラムが検討され作成されている最中であるが、要点と問題点について述べる。

1. これまでの臨床研修と問題点

日本では医学部卒業直後の医師は、医師国家試験に合格して医師の免許証を取得したとしても医学知識は豊富であるにもかかわらず基本的臨床能力に欠けることが指摘されている。さらに卒業後の臨床研修も、現行のように直接専門の診療科に所属して行う場合、医師によってはほとんど基本的臨床能力を持たない医師ができあがり、医療現場で様々な問題をおこすことも社会から批判されてきた。このような点を改善するために、卒業直後の臨床研修必修化が計画されているのである。

2. 新しい研修制度の要点

全人的な幅広い診療能力を身につけるために、指定された臨床研修病院において、基本的必修診療科目である内科、外科および救急部門（麻酔を含む）を6ヶ月以上、小児科、産婦人科、精神科および地域保健・医療をそれぞれ1 - 3ヶ月間ローテーションして研修するプログラムを作成し、研修医はそのプログラムに従って研修する。臨床研修病院の臨床研修委員会や研修センターがプログラムを作成し運用する。

3. 臨床研修病院

基本的診療科を有し、いくつかの規程に合致する病院が臨床研修病院として指定され、一つの病院のみで研修する場合は単独型、他の病院と協力して病

院群を形成し研修を行う場合は管理型研修病院となる。指定されなくても管理型に協力する協力型病院や施設になることができる。

4. 定員、募集・応募方法

定員は病床数で上限が決められている（2年間で10床あたり1名）。募集は全国に公開され、全国の研修予定者がプログラムに応じて希望すること（マッチング）が可能になる。大学病院における研修はその大学出身者と外部からの希望者が同数程度が望ましいとされている。

5. 研修プログラム

最初の1年は基本的診療科である内科、外科および救急（麻酔を含む）を各6ヶ月研修し、2年目に産婦人科、小児科、精神科、地域保健・医療を研修する。大学病院内では2年間で60 - 70名しか研修できないので、協力病院・施設と綿密な連携する研修プログラムを構築する。

6. 問題点

研修医の処遇については明確に決定されていない。研修中はアルバイトが禁止されているので、それなりの処遇がなされないと、昔のインターン制度のようになる。プログラムや研修病院とその指導者次第で、研修が学生実習のようなローテーションとなり、実のある研修にならない可能性がある。専門性が高い領域に進む医師が少なくなり専門医になるのが遅れる危惧もある。卒業生の中で出身大学や地元に残る人が少なくなり、大学院などの充実にも影響する恐れがある。

以上、まだ不明確な点も多いが、今後数ヶ月以内に詳細なプログラムなどが決定される予定である。

* 学生委員会から *

多発する交通事故について

学生委員長 久 保 真 一

昨年来、学生が関わる交通事故が頻発しております。運転中に追突したり、自転車走行中に撥ねられる事故が多くなっており、学生が、死亡事故の加害者・被害者となった例も発生しております。学生自身が日頃からの交通安全への意識を高めるとともに、保護者の皆様も交通事故に対して注意喚起を促すようお願いいたします。

また、事故処理においても、適正な対応が重要です。学生の中には国家試験への影響を恐れ、対応に悩む者もいるようです。しかし、適正な事故処理こそが問題の解決への早道です。事故にあつたら学務係へ「交通事故届」を出すとともに、対応に困った場合は学生委員に相談して下さい。また、保護者の方とも連携して適正な事故処理に当たしましょう。

「変わる管理栄養士の教育について」

実践栄養学講座教授 山本 茂

食生活を中心とする不適切な生活習慣が引き起こす疾患が国民の健康問題の中心課題となり、この対策に管理栄養士の役割の重要性が認識されてきた。この現状に対応できる管理栄養士を養成するために、新しい管理栄養士養成施設カリキュラムが平成14年から施行され、国家試験のガイドラインも発表された。

養成施設では管理栄養士資格を有する教官の必要数が大幅に増えた。従来は、教授・助教授・講師の専任教員は7名以上で、そのうち管理栄養士2名以上、医師1名以上であり、また専任助手は6名以上であった。新しい規則では、専任教員は8名以上で、そのうち管理栄養士4名以上、医師1名以上で、専任助手は5名以上（うち管理栄養士は3名以上）である。

履修単位数でみると、専門基礎分野は従来の42単位から38単位へとやや減少し、専門分野は29単位から44単位へと大幅に増加した。中でも臨床栄養学4単位は、臨床医学入門（単位数任意）と臨床栄養学8単位に区分され、実質的に倍以上の単位数となり、専任教員は医師ではなく管理栄養士となり、医師は臨床医学入門担当となった。

社会的にみると、管理栄養士の配置は医療現場のみならず、市町村、学校、施設、その他においても法的に定められている。さらに、子供の栄養問題が重要になり学校栄養士が栄養教育のできる栄養教諭になろうとしている。管理栄養士は、今、国民の健康を増進し、医療費削減の牽引車としての役割に大きな期待が寄せられている。



医 学 部 ト ピ ッ ク ス

第18回蔵本祭

11月1日から4日までの日程で第18回蔵本祭が開催されました。今年のテーマは「Working as One」。「一丸となって学園祭を盛り上げていこう」という意味でした。「木枯らし1号」のあとで冷え込む中、幸い天候にはなんとか恵まれ、学生実行委員会のもと、模擬店、ステージ企画、コンサート、学術講演会などの各種企画が、医学部、薬学部、歯学部の学生の参加で行われました。



徳島大学医学部附属病院ホームページ

医学部附属病院のホームページがリニューアルされました。患者さんに対する情報発信が目的ですが、学生、保護者の方々にも是非見ていただければと考えております。

医学部のホームページも来年2月を目指して現在リニューアル中です。新しいホームページが公開されましたら、ご案内いたします。



●●● 医学研究科大学院教育研究委員会から ●●●

「大学院医学研究科の改組、MD-PhD コースの導入、修士課程の設置について」

大学院教育・研究委員会委員長 佐野 壽 昭

1. 徳島大学大学院医学研究科の改組について

近年、生命科学分野の急速な進歩とともに、医学は細分化され、新しい学問領域や診療分野が生まれ、医学・医療に対する社会のニーズも多様化しつつあります。徳島大学大学院医学研究科は、研究大学院としてこれまで以上に集学的、学際的な教育・研究体制を充実させ個性的な研究を行うべく、この4月から新しい組織に衣替えをしました。

具体的には、研究分野によって統合された基礎系・臨床系講座融合型の大講座制を導入し、専攻を従来の5つから「医学専攻」(一般専攻)と「プロテオミクス医科学専攻」(独立専攻)の2つに分けました。新組織では従来の講座は新しくは「分野」と呼ぶことになり、名称もかなり変更されました。表のように、「医学専攻」は9つの大講座から構成され、「プロテオミクス医科学専攻」は基幹講座、協力講座、連携講座から構成されます。学部ではなく大学院に重点を置き、研究と大学院教育に専念する独立専攻の設置は、徳島大学の長年の悲願でした。四国で唯一の独立専攻の設置は、研究大学院としての発展を目指す本大学院にとって大変意義深いものです。

組織体制の改編とともに、大学院カリキュラムも大幅な見直しを行い、入門領域から専門的領域へと段階的、体系的に学べるように構成されたほか、分野・講座間の交流を積極的に行うため複数の分野・講座での単位取得を義務づけるようにしています。

2. MD-PhD コースの導入について

研究意欲の旺盛な学部学生に、高度な研究に参画できる機会を早期に与えること、学部・大学院教育をより多様性のあるものにするを目的に、平成15年度春から MD-PhD コースを導入します。その概略は、次の通りです。

MD-PhD コースを希望する医学部医学科学生は4年次終了時点でいったん医学部を中途退学し、大学院に入学する(学部成績評価と面接試験をもとに判定)。大学院で教育・研究指導を受け、早ければ3年で修了し、学位(博士 PhD)が授与される。学士の資格と医師国

家試験受験を希望する者は学部5年生に再入学する(試験は免除)。再入学後、臨床実習を中心に2年間勉強し、国家試験に合格すれば、医師(MD)の資格を得る。従って、最短で PhD の資格は医学部入学後7年、医師免許取得までは9年となります。卒後臨床研修が必修化されますと、学部6年と研修2年を終えてからの大学院となり、大学入学後、大学院修了までに11-12年必要となるのに対して、この制度では7-8年でよく、早期の研究が可能になります。

3. 修士課程の設置について

医科系以外の大学を卒業した人々への門戸を広げるべく、平成15年度春の医学修士課程開設を目指して検討を行っているところです。

専攻名	領域名	大講座名	新分野名	旧講座名	教授名
医 学 専 攻	発達予防医学領域	発達発達医学	機能解剖学	解剖学第二	福井 義浩
			小児医学	小児科学	黒田 泰弘
			女性医学	産科婦人科学	苛原 稔
		病態予防医学	分子細胞生理学	生理学第一	吉崎 和男
			生体防御医学	寄生虫学	安友 康二
			臓器病態治療医学	内科学第二	伊東 進
	神経情報医学領域	社会環境医学	予防医学	衛生学	高瀬 洋介
			形態情報医学	解剖学第一	石村 和歌
			統合生理学	生理学第二	森田 雄介
		情報統合医学	精神医学	神経精神医学	大森 哲郎
			脳神経外科学	脳神経外科学	永廣 信治
			分子機能解析学	分子機能解析分野	塩見 春彦
	感覚情報医学	病態情報医学	情報伝達薬理学	薬理学	玉置 俊晃
			慢病病態制御医学	麻酔学	山下 修造
			病態情報診断学	臨床検査医学	土井 俊夫
		感覚情報医学	視覚病態学	眼科学	塩田 洋
			耳鼻咽喉科学	耳鼻咽喉科学	武田 憲昭
			神経情報医学	難聴診療部	梶 龍児
再生修復医学領域	臓器病態修復医学	人体病理学	病理学第一	佐野 壽昭	
		臓器病態外科学	外科学第一	田代 征記	
		循環機能制御外科学	心臓血管外科	北川 哲也	
	生体防御腫瘍医学	泌尿器科学	泌尿器科学	香川 征	
		環境病理学	病理学第二	泉 啓介	
		病態放射線医学	放射線医学	西谷 弘	
感覚運動系病態医学	分子制御内科学	分子制御内科学	内科学第三	曾根 三郎	
		病態制御外科学	外科学第二	門田 康正	
		法医学	法医学	久保 真一	
	形成外科学	皮膚科学	皮膚科学	荒瀬 誠治	
		運動機能外科学	運動機能外科学	安井 夏生	
		形成外科学	形成外科	中西 秀樹	
プロテオミクス医科学専攻	基幹講座	生体制御医学	分子病態学	生化学	佐々木卓也
			分子細菌学	細菌学	大西 克成
			ウイルス病原学	ウイルス学	足立 昭夫
		協力講座	分子予防医学	公衆衛生学	中堀 豊
			生体情報内科学	内科学第一	松本 俊夫
			応用分子酵素学	酵素分子化学	木戸 博
	連携講座	生体応答医学	分子代謝情報学	酵素分子生理学	谷口 寿章
			免疫情報医学	情報細胞学	松本 満
			生体情報統御学	分子細胞学	杉野 弘
		連携講座	分子遺伝学	分子遺伝学	姥名 洋介
			遺伝情報統御学	遺伝制御学	福井 清
			ゲノム遺伝情報学	遺伝情報分野	板倉 光夫
		ゲノム機能解析学		谷上 信	
				高橋 永一	

● 編 ● 集 ● 後 ● 記 ●

医学部から、学生や保護者の皆さんへの情報発信として、広報誌を発行しようという提案が黒田前医学部長からなされ、今回やっと第1号を発行することになりました。この11月に就任された曾根新医学部長の挨拶、教育・学生指導に関わる各委員会から、トピックスを寄せて頂きました。今後は、医学部ホームページのリニューアルとともに、広報誌も充実させ、改革の渦中にある本学の活動をお伝えできればと考えております。(久保)

医学部だよりへのご意見・ご要望は、こちらのメールアドレスへお願いします。(iggakus3@jim.tokushima-u.ac.jp)